

## 第5回教育力向上福岡県民会議議事録（要旨）

1 日時 平成20年1月15日 15:00～17:00

2 場所 ホテルレガロ福岡「ローズルーム」

3 会議次第

(1) 開会

(2) 議事

説明

意見交換

4 会議内容等

<資料についての説明事務局>

教育力向上福岡県民会議地区分科会、パブリック・コメントの概要と主な意見

<協議>

【会長】

今日が第1次提言についての最後の議論になる。事務局からの説明があったが、地区分科会やパブリック・コメントの意見をもとに、各項目について各委員の意見をいただきたい。第1次提言としてまとめていく作業はどうなるのか。

【事務局】

各項目ごとにある地区分科会やパブリック・コメントの意見を第1次提言に盛り込むか、県民会議委員の判断をもとに文言等の修正を行う。その後、委員の了承を得て、第1次提言を確定することになる。

【会長】

量としては膨大であるが、地区分科会、パブリック・コメントの御意見に沿って、各委員の意向を伺い、事務局で第1次提言に反映させてほしい。

この県民会議は提言をまとめるための会議ではなく、アクションプランにつながっていくためのたたき台、バイブルをつくる会議だと考えている。細かな修正よりも、この提言に基づいて福岡の教育がどのように変わっていくか、どういうアクションがついてくるかということを議論し、福岡の特徴ある取組がなされるかという期待をもって参加している。

第1次提言を読むと、かなりマイルドになっているなという印象を受けた。例えば、4頁と5頁にある体験活動では、よいことを書いているが、具体的にどんな取組になるのかがわかりにくい。学校長がよい取組だと思っても、それからどのように進行し、

どのように実行していくのかがわからない。提言だけに終わるのか、具体的なアクションプランまで詰めていくのか。今後のスケジュールはどうなるのか。

【会長】

私たちが議論しているのは、第1次提言である。敢えて言うと精神論も含めて、ポジティブというか、アグレッシブというか、現在の問題をどのように解決するかという具体策ではなく、幹をまとめている。地区分科会やパブリック・コメントの意見を見るとかなり具体的なものや実際の方策に関するものが多い。そこは、第2次提言で議論することになる。

【事務局】

会長の説明の通り。第1次提言では、子どもを育てる原則論、基本的な考え方を示し、具体的な施策等については第2次提言で検討していただくことになる。

資料3は、あくまでも案であるが、1月末に知事への提言となる。それを受け、2月から4月にかけて、具体的な方策等について専門部会で検討する。その結果を第6回会議で報告し、審議いただくことになる。

【会長】

専門部会は、4つの課題について設置するのか。

【事務局】

これから検討していく。

【会長】

第1次提言は、アクションプランを実行するための幹となる考え方である。したがってアクションプランの具体化等については専門部会で検討することとなる。地区分科会やパブリック・コメントの意見のうち、具体策に関することは今回は議論しないことになる。

【副会長】

今回の第1次提言では、幹となる部分、骨格となる部分を提示していくことになる。その後、それに基づいて子どもの意欲、自尊感情、規範意識、体力等を高めていく具体的な取組を第2次提言で考えていくことになる。今日の段階では、これまでの案、地区分科会やパブリック・コメントの意見を参考にしながら、落ちているところはないか、足りない部分、さらに考えを深めていく必要がある部分はないのか、といったことを議論することとなる。

2月～4月の専門部会で検討したたたき台を第6回会議で審議し、アクションプランを決定することになるのか。

【会長】

第1次提言は、私たちの責任だが、第2次提言も私たちの責任である。ただ、議論は専門部会で行う。それを第6回会議で承認して、また地区分科会等で意見を聞くことになる。第1次提言も第2次提言も最終的には、この県民会議で責任をもつことになる。

教育力向上に取り組むのは現場なので、6月の地区分科会が大切である。先日の地区分科会に参加して一番印象に残ったのは、「教師の多忙感」に書いてある「教師が元気ができるような提言にしてほしい」という意見だった。教師は多忙な中で、子どもの成長が見えれば一生懸命に取り組む。やらされる提言であれば教育力向上につながらない。また、「簡潔な提言がよい」という意見もあった。専門部会の中に地区委員も参加していただき、現場の意見も反映した第2次提言にしてほしい。

【会長】

大切な意見である。しかし、現場で何ができて、何ができないかという議論はここではしたくない。特に、第1次提言では、現場の状況を踏まえることは必要だが、それにとらわれすぎることなく、福岡の将来を担う福岡がめざす子どもに関するビジョンを打ち出したい。現場でできそうなことだけを提言しては、真の教育力向上につながらない。少し思い切った提言にしたい。前向きで積極的な意見を取り入れたい。

地区分科会とパブリック・コメントででた意見を、もれのないように第1次提言に反映させるということか。

【会長】

すべてを入れる必要はない。意見を出した方の都合によって出されている。委員会の見識として出すべきである。

地区委員会に参加したが、学校長の意見はあまり出されなかった。

【会長】

パブリック・コメントでは、現場が実現できることが多く出されている。それに、私たちが引きずられては、提言にならない。ハードルを高くするなど、ある程度乗り越えないといけないことも含めた提言にしなくてはならない。

専門部会の議論に期待している。現場の状況や改善の取組はわかるが、ビジネスマンから見ると結果が出ていない。その状況をどう変えるかという機会を知事が与えている。運良く自分たちが参加しているという気持ちで行動できるようにしてほしい。次の地区分科会では、「すごいチャンスがきた。思い切ってやろうとする気があれば、変えられる機会がきた。福岡からみんなで変えよう」といったようにオポチュニティ

(好機)がきたと意識付けしてほしい。福岡は知事から変えようとしているといえ、元気ができるのではないかと思う。

#### 【会長】

現場は大変だと思うが、将来を担う素晴らしい人材を育てるにはどうしたらよいかという考えに立って、少しハードルの高い提言、アクションプランを作れば、少しずつでも進展するかなと思っている。

アクションプランを具体化させていけば、行政の支援が必要になってくる。それは行政で考えればよいことであり、この場ではそこまで考えずに提言をまとめたい。

#### 【会長】

では、地区分科会、パブリック・コメントの意見をもとに、各項目ごとに検討していきたい。積極的に取り入れるべき意見、第1次提言案に不足している意見を出していただきたい。まず、「はじめに」に関する意見。

「県民総がかりで取り組む」を記述する意見は取り入れたい。いろいろな取組を行ってきたが、行政の支援にしても、県と政令指定都市がばらばらである。政令指定都市も一緒に取り組むことが大切である。例えば、「家庭の日」という取組を北九州市が行っても、近郊の企業に勤めている人がやらなければ効果は上がらない。北九州市、福岡市を含めて、福岡県が一体となって取り組んでいくという強い思いを出したほうがよい。

「健康」という言葉に配慮が必要という意見がある。「福岡がめざす子ども」に「たくましい」という言葉があるので、「健康」を「たくましい」に変えてはどうか。「学ぶ意欲、自尊感情、規範意識は心身の『たくましさ』と密接な関係があり・・・心身ともにたくましい子ども・・・」と変更してはどうか。

#### 【会長】

「福岡がめざす子ども」に関する意見。

「人権意識をもつ心」という意見がある。地区分科会での意見の7～8割は、それぞれの立場からの願いや思いから出されていた。その中身も「福岡の教育ビジョン」(案)を否定すべき内容のものではなく、さらに付け加えて希望や要望も出されていた。積極的な意見は取り入れる方向でよいと思う。「人権意識」という言葉の中に含まれる内容は、原案にある「自律心」や「思いやり」に含まれていると認識している。さらに、「人権意識」という言葉を重ねてカバーしたいという意図は何なのかということとは議論したい。

【会長】

「福岡がめざす子どもを育てるアクションプラン」に関する意見

「学校がもっと権威をもって・・・」とある。本来の教育のあるべき姿に戻りつつあるという意見だと思う。尊厳、威厳は必要だと思う。

【会長】

「実体験を重視した教育を推進しよう」に関する意見

「様々な大人との出会いの大切さ」は、現在の体験活動の重要な課題だと思っている。子どもがよく知っている大人は、「先生」と呼ばれる子どもを相手にすることを職業としている大人である。世の中には、後ろ姿の片鱗も真似してほしくない大人が大勢いる。そういう大人もしっかり見せなくてはいけない。「先生」と呼ばれる以外の大人との出会いが欠落している。それが今の子どものひ弱さの根底にあるのではないか。

「長期宿泊体験の内容を学校に背負わせるのは、引率する教師の負担を考えると無理ではないか」という意見がある。実行するときによくよく考えないと、先生を泣かせるだけになってしまう。長期宿泊体験の効果は論証されている。やったほうがよいという結果がでていいる。しかし、やるつらさ、苦しさをもるに教師に背負わせるやり方では本当の教育効果は上がらない。

本来教師がすべき仕事とする必要がないことをごちゃ混ぜにしている。それが負担として跳ね返ってきている。プロはプロの仕事をするべきである。トラブルメーカーとの対応は、教師ではなく、プロの人がすべきである。そういうことをやって負担を軽減し、効率や教育の効果を上げていく。そのためには、費用を伴う行政の支援が必要である。

ボランティア制度はもう少し、しっかりと考えなくてはいけない。子どもの前でタバコの火をつける行為をしたり、遊んでばかりいる指導者がいた。また、スポーツの指導で子どもを叩く指導者もいた。そういった指導を受けた子どもが大きくなり、新たな指導者となったときが心配である。ボランティアで指導していただく方を指導する必要がある。何か規制を加えてもよいのではないか。

【会長】

教育にふさわしいボランティアの在り方は専門部会で検討してほしい。

「高等学校にある規律と友情の小・中学校版」という意見。集団生活の習慣をつける体験活動であり、中学校の発達段階に見合った活動を実施することは意義がある。

異年齢集団による活動は、上級生がある程度成長していなければ、下級生を指導できない。そこは慎重に考えるべきである。

今の子どもたちは、転んで顔にけがをするなど、遊びの習慣がついていない。遊びの家庭教師を雇っている家庭がある。それを地域や県全体でやることは考えられないか。遊びは、自分たちでルールをつくったり、危険性を察知したりして、成長させていく。1対1では育たない。

【会長】

「学校を支援する体制を整備しよう」に関する意見。

【会長】

「地域の教育力の大切さをもっと協調してほしい」という意見があるが、どのように反映させるか。

「マスコミの支援」について。学校を支援するために積極的にボランティアに入っ  
て何かをすとか、地域が子どもの体験活動のために受け入れ体制をつくるといった  
こともある。そういった面だけではなく、保護者や子どもが学校を信頼できるような  
状況づくりが大切である。そうした場合に、マスコミが非常に問題である。学校の先  
生の元気がなくなるような、子どもたちがますますよくなるような報道の仕方を  
している。商売なので、読者や視聴者の注目を集めるようするのかもしれないが、マ  
スコミが学校を貶めている状況は非常に大きい。メディア関係も仕事ではあるが、一  
緒に話し合う場をもつことが必要ではないか。元気がでるような報道の仕方をやっ  
ていただくようにしてほしい。地域や保護者や子どもたちが学校、教師を信頼でき  
るような雰囲気醸し出してくれる報道の在り方を考えてほしい。

【会長】

マスコミの意識をどう変えるかということも私たちの仕事の一つである。

事実を伝えることは大切だが一点凝集の報道が多い。子どもに与える影響や家庭と  
のつながりなど、先を考えずに、事実関係だけを報道している。委員に参加してもら  
う等、批判するだけではなく、仲間になってもらうことが大切である。

よいことも悪いことも知らせるが、すぐに来るのは悪いときである。しかし、それ  
は私たちの対応も悪い。日頃から、人間的な付き合いを通して、よい記事を書いても  
らう努力も必要である。教育に関するマスコミ対応のプロが必要である。

メディアの力は大きい。メディアからの情報によって一斉にみんながその方向に意  
識を変化させる。例えば、放送メディアは視聴率やスポンサーに一喜一憂することが

多い。スポンサーとなる企業のモラルにも期待したい。今、教育的によい番組をつくりたいという企業もある。企業やメディアの受け手が、共にメディアを変えるくらいの気持ちでやっていきたい。

地域の方々は学校に対する理解が浅い。今どきの先生はどういう人間かということを知りたい。地域の人には知らない。しっかり認識する必要がある。学校の先生も地域のボランティアはどんな人なのかを知らない。ボランティアの経験のある先生であれば、地域のボランティアをスムーズに対応し、受け入れることができる。学校とボランティアが互いに知ろうとすることを努力しなければならない。完璧なボランティアの人はいない。50%で満足することが大事である。

各国の状況を調べてみると、「尊敬」という言葉が非常に大切なキーワードである。戦後、様々な事情から「尊敬」が否定されてきた。教育学事典にも心理学事典にも「自尊感情」は出てくるが、「尊敬感情」「尊敬意識」という言葉は出てこない。フィンランドでは、先生を生徒が尊敬する割合が高い。フィンランドの先生は大学院をでているというが、必ずしもそうではない。トルコやシルクロードの調査でも、いじめや不登校がない、子どもが穏やかに学校生活を送っているところは、子どもが教師を尊敬している。中国では94.3%が教師を「とても尊敬している。」日本は、「まあまあ」を合わせても52.9%である。教育の原点を見直してみる必要がある。家庭や地域も含めて、「尊敬」に関する言葉を出す必要があるのではないか。

#### 【会長】

校長が地域に出て、企業に出て、支援を獲得していくというのは大切である。

高等学校では行われつつある。

これまで「平等」というのが強すぎた。努力をした結果については平等ではないということは当然であり、教育の場で良い方向に働いてほしい。

地域の活動に参加している。部活動の支援を市町村が負担しているが、一人あたり3～4円である。予算がない。土日の活動も難しい。しかし、地域に出て予算の確保をしようとするのは、本来の教師の業務を大切にしようという意見と矛盾するのでは。

#### 【会長】

上に立つ人と教師は違う。地域に出て支援を獲得することを教師はすべきではないが、校長はすべきである。学校に対する責任も違う。全員にしてもらうのはかえってマイナスになる。

#### 【会長】

「保幼の連携、各校種間の一貫した教育を推進しよう」に関する意見

地区分科会でも「保幼の連携」はかなり出された。今の流れとしては、認定子ども園、幼保一元化などが進められている。その連携には、県が市町村に窓口を設置しないと難しいのではないか。

中高の連携で大切なのは、学習指導である。高等学校で中学校の内容の手作りの教材を作成している。中学校も小学校の内容を指導していると聞く。小学校で、基礎の定着を図る手立てを講じてほしい。一貫した教育は学習指導を中心としたものが必要である。コーディネータの存在が必要である。

幼稚園では公立と私立の交流が全くない。幼小の連携、保小の連携は行っているところが多いが、その内容は小学校に入学する子どもの学級編成のための情報収集である。小学校の教師は、幼稚園や保育園でどんな内容の教育をしているかをほとんど知らない。研修などで連携をしていく必要があるのではないか。

#### 【会長】

「校長のリーダーシップと教師の能力を高めよう」に関する意見。

修正が必要ではないか。「教師の能力を高めよう」では、教師の能力がないということになる。むしろ、必要なのは「校長のリーダーシップや教師の力量が発揮できる体制を整備しよう」ということではないか。意見としても教師の多忙感、本来の教師の業務などがでてきている。教師の能力が低いのではなく、塾の先生よりも劣っているわけでもなく、本務である学習指導に邁進できない状況にある。

校長のリーダーシップを高めることで、組織がギスギスするという意見がある。大切なのはリーダーシップの中身である。組織としては校長のリーダーシップは必要である。きちんと書くべきものである。

#### 【会長】

「家庭の教育力を高めよう」に関する意見。

冒頭で「学校や地域が家庭の教育を支援する」という文言が必要ではないか。保護者のせいにするだけはいけない。

伝えたい保護者は学校に出てこないという意見がある。30年以上前から言われている。出てこないことを踏まえて考えないといけない。積極的に参加している保護者と教師が中心になって、地域全体を引っ張っていくプログラムを考える必要がある。

「これさえやればうまくいく」方法は無い。二重三重に優れたプログラムを重ねていくことで形が見えてくる。小学校入学前の身体検査で子育てに関する講話をしている市町村もある。少ない機会を捉えた地道な取組を進めていく必要がある。

学校評価では、保護者の協力のもとに教育をよくしていく取組をしている。そのような組織を活用することも考えられる。批判的な学校評価ではなく、協力的な学校評価にしていかなくてはならない。

学校、地域が家庭を支援することは記述してほしい。「早寝・早起き・朝ごはん」の取組でも、担任が一生懸命取り組んでいるところは、取組のカードの回収率が100%である。学校の支援する体制を整え、参加しない保護者にも子どもを通して参画できるのではないかと思う。

「子どもの教育に関わろうとしても、仕事で忙しく関われない」という意見がある。PTA活動などに欠席することを認めるような書き方はよくない。いろいろな工夫をして、何とか子どもの教育に関わろうとするのが保護者の役目である。「学校に行きたくても行けない。」とあっても年に1回程度であれば行けるのではないか。

子どもをもつ保護者の最低限の責務としてすべきことを広報のような形で、あらゆるところにわかるようにしてほしい。当たり前ことができていることをPRすべきである。

【会長】

「地域の教育力を高めよう」に関する意見

【会長】

「本質的な課題等」に関する意見

【会長】

「福岡の教育ビジョン全体、その他」に関する意見  
アンビシャスとの関連についてはどうか。

【副会長】

2つの大きな取組が示されると、県民の方も「今度はこっちに変わったのか」と誤解してしまう。これまでの実績や現在の取組が元気をなくしてしまうと困る。明確に示すことが必要である。アンビシャスは家庭・地域、教育ビジョンは学校を支えるものとして位置づけた文章が必要である。

**【会長】**

一般の方にわかりやすいように提言する必要がある。

**【会長】**

本日、言えなかった御意見等は事務局に連絡してほしい。

本日の委員の意見を踏まえ、第一次提言「福岡の教育ビジョン」を作成するが、作成については、会長、副会長に一任いただきたい。

出来次第、各委員に送るので、意見があれば、事務局に連絡してほしい。

また、知事への提言についても、会長、副会長に一任いただきたい。

なお、第二次提言に向けての審議は、県民運動など、より具体的に踏み込んだ内容になると思われるので、次回の本会議を開催する前に専門部会を設置し、第二次提言の素案等を検討してもらっておく必要があると思われる。

専門会議の委員については、会長が指名することとなっているので、委員の人選等についても会長に一任いただきたい。

**<連絡>**

**【事務局】**

第一次提言につきましては、委員の皆様の最終的な確認の後、事務局で日程を調整の上で会長、副会長から知事へ提言していただくことといたします。

また、第二次提言の審議でございますが、本会議は、次回、4月又は5月に開催したいと考えております。委員の皆様には、後日、日程等についてお尋ねいたしますので、よろしく願いいたします。

では、以上をもちまして、第5回教育力向上福岡県民会議を終了させていただきます。ありがとうございました。